

# 時代の風

未曾有の災害に、重大な原発事故が重なった東日本大震災。本紙「時代の風」執筆者にそれぞれの思いを記してもらった。

「天災は忘れた頃にやってくる。だけではない。前回の災害を噛みしめて教訓を学び備えれば、次なる天災はそれを嘲笑うように全く想定外の角度から奇襲攻撃を仕かけてくる。都市型の神戸の後は、新潟や宮城・岩手の山間部であった。次は首都直下か、はたまた大阪や京都か。否、それ以上に日本列島の南方に沈み込むプレートが起こす大地震津波であろう。それは必ず来る」

私がこう書いたのは2カ月前、河田恵昭著「津波災害」への本紙書評においてだった。事実は南海・東南海地震の津波ではなく、東北沖のプレートが起こすすさまじい大津波であった。またも天災は奇襲攻撃を決めたのである。

防衛大学校校長

おきべまこと  
五百旗頭 真



## 「複合事態」のどん底で英慮を

「被害ゼロ」という報道には2種類の意味がある。文字通りそうである場合と、逆に壊滅的な被害を受けたため、外部社会へ被災を伝えることができない場合だ。16年前の阪神大震災の朝、現地のわが家によくよく電気が通じテレビをつけると「死者38人」のテロップが流れていた。衝撃を受けながらも、その程度なのかと思った。兵庫の地

政府は兵庫の現地に出先をつかって共同対処した。この度、被災地は一つの行政区画に収まらない。引き波により大洋に流出した人もいる。役場が消えてしまった町もある。

そんな中、広域対処の軸として浮かび上がったのが自衛隊である。政府は自衛隊に10万人規模での出動を命ずるとともに、仙台の君塚栄治東北方面総監を

波の犠牲者に対し、原発事故が深刻化したとしても犠牲者は限られたものである。だが数には代えられない放射能への恐怖がある。それが人々の心を金縛りにしている。東京から脱出する人、外国へ逃れようとする人がいる。休業する会社もある。こんな重大危機においてこそ、社会の各所が自らの持ち場がなんぼり、経済崩壊を防がねばならない。自由と能力のある人々には東北地方への支援活動が期待される。日本人はそれができる国民である。だのに核の脅威が人々に逃走の集団心理を呼び起こしかねないのである。

この度は、ガレキに埋もれた一人ひとりでなく、津波に流されて消失した町の住民が集団的に行方不明となった。最も悲惨な「被害ゼロ」地域が、岩手、宮城、福島、福島の3県を中心に数百に広がったのである。

この度は、ガレキに埋もれた一人ひとりでなく、津波に流されて消失した町の住民が集団的に行方不明となった。最も悲惨な「被害ゼロ」地域が、岩手、宮城、福島、福島の3県を中心に数百に広がったのである。

陸海空にまたがる災害対処の統合任務部隊指揮官に任命した。交通体系が不全の中、全自衛隊のもつ機動力を総合運用して救援活動の迅速化・実効化を図ったのである。

「複合事態」である。福島原子力発電所の被災が地球的な関心を集める大災害となった。2万人を超えるかもしれない大津

脈である。あの敗戦の中でさえ、国鉄はすずなりの人々を運んで社会を支えた。この災害で日本の経済社会を死なせず、再生の機会とする英慮がまたれる。